

目 次

はじめに	1
I 今なぜ検証するのか	1
1 検証の手がかり—奥又合宿備忘録—が見つかった	1
2 50 年にわたる高井の抗議書簡の正当性の実証 —チーフリーダーの指示を守っておれば遭難は起こらなかったと—	2
3 石岡が軽率登山をナイロンザイルに転嫁したことを認めた 石岡—高井会談	2
II いま何を検証するのか	5
ナイロンザイル切断前の問題—登山行為の問題—未解決	
III 前穂高岳東壁遭難について	
1 岩稜会創立と前穂高岳東壁登攀を目標にするに至った経緯	6
2 前穂高岳東壁遭難の概要	7
IV 遭難原因の追及—登山行為の検証—	
1 石岡は「岩稜会員に告ぐ」の中で遭難の原因は二つ、と分析していた	9
① 「岩稜会員に告ぐ」が出されたときの会の動向	12
② 遭難原因(1)—力のない新人を漫然トップに立てた—	14
イ 関係者の証言	
a 石原証言	14
b 澤田証言	14
ロ 石原は登攀リーダーか、それとも三人は「横の関係」か	14
ハ なぜ澤田はトップを交代しなかったか	16
ニ 「上下の関係ではなく、横の関係でした」という発言に対する 高井の見解	16
ホ 「若山のトップ交代」は重大な遭難原因	17
③ 遭難原因(2)石原一郎リーダーの指示を石原国利が無視	17
イ 石原一郎チーフリーダーの指示とは	17
ロ 石原がリーダーの指示を無視	18
2 新たに浮上してきた遭難原因	22
遭難原因(3) 石岡の若山起用	
① 登攀隊員決定の経緯	22
② どのようにして若山の起用は決まったか	25
イ 昭和 29 年岩稜会総会から	25
ロ 石岡と石原一郎の間での事前協議が存在	26

ハ	遭難直後の電報と電話から	26
ニ	「おはよう日本」から(平成18年7月2日NHKテレビ)	27
	a 若山の起用を決定し、ナイロンザイルを購入	34
	b 石岡、五朗の墓前で告白—ナイロンザイルは若山のために購入—	
ホ	「奥又合宿備忘録」から—バッカスの注意とは—	29
	《若山は登攀隊員に起用されることを知っていた》	
ヘ	「岩と雪」1から—若山を起用した石岡の心境—	30
③	なぜ若山五郎なのか	31
④	石原兄はなぜ若山起用に反対できなかったのか	32
⑤	石岡が登山技術未熟の新人若山を起用したことが最大のミス	33
V	ナイロンザイル事件の影—「遭難」を「ナイロンザイルの欠陥」に転嫁—	34
	まとめ	36
	文献	37

前穂高岳東壁遭難 50 年目の検証

—ナイロンザイル事件の光と影—

はじめに

前穂高岳東壁遭難から 56 年経った現在、前穂高岳東壁遭難は「ナイロンザイル事件」と同一視されるようになっており、その遭難原因はナイロンザイルの欠陥によるものであって、ナイロンザイル切断前の登攀にはなんら問題はなかった、と結論づけられているようである。

しかし遭難当初より「石原一郎リーダーの指示に従っておれば遭難は回避できた。五朗ちゃんは死なずにすんだ」と主張し続けていた一人の会員がいた。高井利恭である。高井は何十年にもわたり石岡に書簡を送り警告を発していたが、石岡はすべてを握り潰していた。

一方、前穂高岳東壁遭難の記録は、印刷物「ナイロン・ザイル事件」(1956 年)の中にあるわずかの記事¹⁾と「岩と雪 1」²⁾(1958 年)と三重大学山岳部会報(1955 年)に澤田栄介³⁾⁴⁾と今井喜久郎⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾の記録が存在するだけで、会独自の報告書や救助や捜索の資料は存在しなかった。

ところが遭難から 50 年経った時(平成 18 年 4 月)、石岡宅から「奥又合宿備忘録」(1955 年)が見つかり、そこには遭難救助の状況が詳細に記録されており、高井の主張していた「リーダーの指示」⁹⁾も明確に記載されていた。

遭難以来、岩稜会会長の石岡はナイロンザイルの欠陥の究明には努力したが、ナイロンザイル切断前の登攀については何ら総括してはなかった。それで今回「奥又合宿備忘録」が見つかったのを契機に、ナイロンザイル切断前の登攀について検証することにした。

I 今なぜ検証するのか

1) 検証の手がかり—奥又合宿備忘録—が見つかった

前穂高岳東壁遭難(1995 年 1 月 2 日)から、いやナインザイル事件発生から 50 年経ったとき、石岡の「ザイルに導かれて—石岡繁雄の半生」という自分史が発刊された。そして平成 18 年 1 月には井上靖原作の「氷壁」が NHK で放映されたが、ナイロンザイルの切断事故がカラビナの事故に変更されて数々の波紋が広がった。

そんななか石岡は平成 18 年 1 月 28 日、天城温泉会館で行われた故井上靖 16 回忌「翌檜忌」に参列し、井上文学館では「氷壁」展－「ナイロン・ザイル事件」から 50 年の教え－を見学した。

その後平成 18 年 4 月 1 日に、その報告会が近所にいる岩稜会員を集めて行われた。会が終了する寸前に、石岡あずみ(石岡の二女)から「だれの字かお分かりでしょうか。ご存知の方ありませんか」と尋ねられて A5 判の古い一冊のノートを見せられた。いろいろの人の名前が挙がったがはっきりしなかった。「これはきっと上田さんやに、間違いはないわ」と高井の言葉にみんな首肯した。

ノートを手にとってみたところ、表紙には「奥又合宿備忘録 1955 年 岩稜会」と書かれ、中を開くと、遭難救助のことが詳細に記載されていた。50 年経った今、なぜこのような資料が石岡宅からみつかったのか、不思議だった。

なかでも室は搜索から帰って遭難の状況を詳細に報告し、上田(たぶん上田先生の字だろうと思われる)がそれをきちんと記録として書き留めていたとは驚天動地の思いだった。

今回奥又合宿備忘録が出てきたのをきっかけに、ナイロンザイル切断以前の登山行為、即ち前穂高岳東壁(以下東壁と略す)登攀について検討することにした。

2) 50 年にわたる高井の抗議書簡の正当性の実証

―チーフリーダーの指示を守っておれば遭難は起らなかったと―

高井は「昼に所定の場所に達しなければ登攀を中止する」と書簡に記載したが、「所定の場所」とは第二テラスであることが奥又合宿備忘録により判明した。高井の主張は正しかったのである。

高井は遭難直後に詳細な登攀記録を書いた薄いノートを石岡に渡したが、返却されなかった。以来、彼はリーダーの指示を無視した事実を固執し続け、高井書簡を出すことになった。書簡の中で彼は遭難を総括して「明らかに刑事事件です」とまで断言したのだが、石岡は何の反論もせず黙認したかのようだった。それどころか彼が石岡宅を訪れる時は必ず歓待されたという。高井書簡は、石岡にとって喉に刺さった魚の骨のように簡単には取り除くことはできなかったように思われる。

3) 石岡が軽率登山をナイロンザイルに転嫁したことを認めた

石岡－高井会談

日 時 2006 年 5 月 7 日(日) 雨

場 所 石岡邸

出席者 石岡繁雄、高井利恭、湯浅美仁、石岡あずみ

「奥又合宿備忘録」が平成 18 年 4 月 1 日に見つかったので、高井と一緒に前穂高岳東壁遭難について検証をすすめていた。5 月 6 日、早いうちに石岡と会談

するようにと高井に提案した。そうしたら5月7日、日曜日の昼前に高井から「今日午後2時すぎからバッカスと会うことになったから」と連絡が入った。あまり急なのでちょっとびっくりした。

天気予報通り連休の最後に雨が降った。石岡邸についたとき雨脚はひどく、靴先で小走りして石岡邸に入った。石岡は座敷で酒宴の準備をして待っていてくれた。高井が石岡と会うときはいつも歓待されていると聞いてはいたが、それは本当だった。

登攀の総括をせずにナイロンザイルへの転嫁を認める

「今日は奥又合宿備忘録がでてきたので、そのことで話に来たのです。備忘録の字は上田さんの字ですよ。当時、家に下宿していたからよく知っているのです」と高井は言って本題に入った。

「ナイロンザイルが切れてナイロンザイル事件が起こったのですが、あの時、石原国利が“昼までに第二テラスに着かない時は引き返す”という指示を守っておれば五朗ちゃんは死ななかつたのですよ」

「うん、その通り。五朗は死ななかつたな」

「もしあの時ナイロンザイルが切れずに宙吊りになって遭難したとしましょう。3~4日吹雪くことはざらにあるでしょう。冬の穂高にヘリコプターも飛ばせず救助も容易ではありません。社会的に大問題になるでしょう。そうしたらバッカスは岩稜会会長として登攀記録の詳細を発表して遭難原因の追求をしなければならぬでしょう」

「そりゃそうだ」

「東壁遭難の時には登攀記録の詳細、中でもリーダーの指示を無視したことなどを発表しなかつたですね。そして山岳会の会長として総括もしなかつたですね。すべてナイロンザイル切断に転嫁しましたね」

「そうやな、それでもナイロンザイル切断の原因を究明しなければどんどん死んでいくからね」

「再発防止の話はいいのですよ。ザイル切断以前に問題があると言っているのですよ。石原国利が指示を無視したことは重大な過失ですよ。どうして三重たとの合同合宿になったか、パーティーがなぜ三人になったかよく記憶しておりません。リーダーが、パーティー編成からみて『昼までに第二テラスに着かないときは引き返すこと』という指示を出したのは、ビヴァークを覚悟しての登攀でなく、日帰り登攀を意味していたからですよ。そのためビヴァーク用の食糧もコンロも準備してなかつたのです。指示を無視して登攀を継続して遭難したことは、とりもなおさず軽率登山ですよ、バッカス、分かりますか」

「ウン、そりゃ軽率登山や」

「この軽率登山が公表されれば、ナイロンザイル事件は吹っ飛んでしまいま

すよ」

「国ちゃんに電話で聞いた時にも、『表立って未解決の問題を世に曝すとナイロンザイル事件が霞んでしまいますよ』と言っていました。よく遭難のことを理解して反省しているのですよ。本当に重荷になっているのですよ」

「人ひとり死んでいるのですよ。石原国利は遭難以来みんなの前で頭を下げたことはないのはけしからんと思って彼との距離をおいていたのですが、そのような気持ちを持っていたと分かりちょっと驚いています」

「分かった。分かった」

ここでバックスは手を差し出して高井に握手を求めた。

「またバックスは『遭難を防止すめのために』という論説を『東海山岳』に書かれていますね」

「覚えていない。そんなのあったのか」

『東海山岳 1号 1964年』にありますよ」

コピーを見せるとバックスはメガネをかけてゆっくりと読み出した。

『なした行為』は軽率登山で、『なすべき行為』は『昼までに第二テラスに着かない時は引き返す』というリーダーの指示ですね。もしそういう行為をしておれば遭難しなかったという『なすべき行為』が優位になりますから、昼までに第二テラスに着かなかったのですから引き返すべきだった、ということになりますね」

「ウン、そうや。これをコピーして」

石岡はすぐ石岡あずみにコピーさせた。

「それから『岩稜会員に告ぐ』の中にはバックスの気持ちがにじみでていますね。今回よく分かりました」

「あれは迷惑だったですよ」

「まずかったか」

バックスは高井の話の主旨が分かったようではあるが、十分に理解できていないようである。すぐナイロンザイルの話に戻っていく。それで話題を五朗ちゃんに向けた。

「沢田の遭難報告書によると五朗ちゃんは B フェースのオーバーハングを登れずスリップしたのですよ。それで沢田の肩車に乗ってオーバーハングを乗り越しているのです。三人パーティーで時間がかかり、その上スリップしたりして予定の時間を 3 時間も超過していたのですから、第二テラスに着く前にリーダーの指示に従って引き返すべきだったのですよ」

「そうだったのか」

「バックスには学者と岩稜会会長と遺族の三つの顔があって、学者としてナイロンザイル事件を解決し、山岳会会長としてはこれらの軽率登山のことを認識

していたにもかかわらず公表せずに握りつぶして、遺族の立場で登攀の内容とナイロンザイルの切断を公表したのでしょうか。バックスの遭難防止論の中の、『遺族は事故原因を不可抗力のかくれみのの中におしこんで犠牲者を軽率のそしりから免れしめたい』という意識が働いたのではないですか」

「ウーン、そうやな」とバックスはうなずいた。

「遭難した時にバックスは、登山の規範倫理に照らして登山が妥当であったか否かを検証して、すなわち軽率登山のことを公表して総括しておくべきだったのですよ。総てをナイロンザイル事件に転嫁したでしょう。ナイロンザイルの欠陥を解明しても五朗ちゃんはこの死に方を良しとしますか。良しとしないでしょう、ね、バックス」

「ウーン…」とバックスはただうなずくだけだった。

「遺族という立場は理解できますが、山岳会会長として毅然たる態度で総括すべきだったのですよ。それをいままで怠っていたのですよ」

「分かった。分かった」と言ってまたバックスは高井と私に握手を求めた。バックスは総てを知っていたのである。 (文責 湯浅美仁)

II いま何を検証するのか

ナイロンザイル切断前の問題—登山行為の問題—未解決

そもそもナイロンザイル事件というのは、前穂高岳東壁事件と蒲郡事件から構成されているのである。石岡は印刷物「ナイロンザイル事件」の中の「事件の概要補足」¹⁰で次のように述べている。

「30年1月2日、前穂高岳東面絶壁で登山者が墜死し、その後1年半になるが、いまだ原因が究明されていない。

今これに関連してすべての出来事を一括して、便宜上「ナイロンザイル事件」と呼ぶこととし、このうち1月2日の墜死事件を『前穂高東壁事件』と呼ぶこととし、4月29日の蒲郡での公開実験を『蒲郡事件』と呼ぶことにする。

ナイロンザイル事件は、この二つの事件を中心にして更にいくつかの付随の事件を含むことになる。

前穂高東壁事件は、事件発生原因が、我々の見解では、せいぜいメーカーの軽い過失で、人間社会ではどこにでもあるような事件と思う。

従ってこの原因については、今後同様な災害を未然に防ぐ意味から、充分討論されることは必要であるが、責任がどうの処罰はどのようのという種類の問題ではないと考える。

これに反して蒲郡事件等は、前穂高東壁事件の副産物として出来たものであるが、これに含まれる社会的意義は正に重大であって、健全な民主主義を維持するために、是非とも正しく解決されねばならぬものと確信する」

していたにもかかわらず公表せずに握りつぶして、遺族の立場で登攀の内容とナイロンザイルの切断を公表したのでしょうか。バックスの遭難防止論の中の、『遺族は事故原因を不可抗力のかくれみのの中におしこんで犠牲者を軽率のそしりから免れしめたい』という意識が働いたのではないですか」

「ウーン、そうやな」とバックスはうなずいた。

「遭難した時にバックスは、登山の規範倫理に照らして登山が妥当であったか否かを検証して、すなわち軽率登山のことを公表して総括しておくべきだったのですよ。総てをナイロンザイル事件に転嫁したでしょう。ナイロンザイルの欠陥を解明しても五朗ちゃんはこの死に方を良しとしますか。良しとしないでしょう、ね、バックス」

「ウーン…」とバックスはただうなずくだけだった。

「遺族という立場は理解できますが、山岳会会長として毅然たる態度で総括すべきだったのですよ。それをいままで怠っていたのですよ」

「分かった。分かった」と言ってまたバックスは高井と私に握手を求めた。バックスは総てを知っていたのである。 (文責 湯浅美仁)

II いま何を検証するのか

ナイロンザイル切断前の問題—登山行為の問題—未解決

そもそもナイロンザイル事件というのは、前穂高岳東壁事件と蒲郡事件から構成されているのである。石岡は印刷物「ナイロンザイル事件」の中の「事件の概要補足」¹⁰で次のように述べている。

「30年1月2日、前穂高岳東面絶壁で登山者が墜死し、その後1年半になるが、いまだ原因が究明されていない。

今これに関連してすべての出来事を一括して、便宜上「ナイロンザイル事件」と呼ぶこととし、このうち1月2日の墜死事件を『前穂高東壁事件』と呼ぶこととし、4月29日の蒲郡での公開実験を『蒲郡事件』と呼ぶことにする。

ナイロンザイル事件は、この二つの事件を中心にして更にいくつかの付随の事件を含むことになる。

前穂高東壁事件は、事件発生原因が、我々の見解では、せいぜいメーカーの軽い過失で、人間社会ではどこにでもあるような事件と思う。

従ってこの原因については、今後同様な災害を未然に防ぐ意味から、充分討論されることは必要であるが、責任がどうの処罰はどのようのという種類の問題ではないと考える。

これに反して蒲郡事件等は、前穂高東壁事件の副産物として出来たものであるが、これに含まれる社会的意義は正に重大であって、健全な民主主義を維持するために、是非とも正しく解決されねばならぬものと確信する」

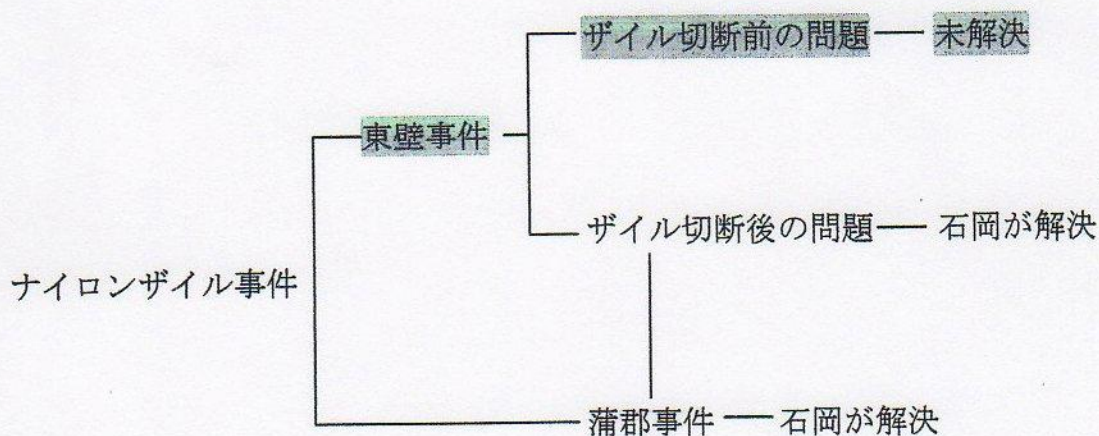
東壁事件はナイロンザイル切断前の問題—登山行為—とナイロンザイル切断後の問題—登山用具—から構成されている。そして蒲郡事件は、登山用具の究明の副産物として発生したものである。

石岡は「岩と雪」111で「この事件が単に遭難死という当初の事件からはなれてまったく内容を異にする新しい、しかも今後の社会に大きな影響を与えると予想される事件に発展したからである・・・」と述べている。

東壁事件のうちナイロンザイル切断以後の問題、すなわち登山用具の究明と蒲郡事件は石岡により見事に解決された。しかしナイロンザイル切断以前の問題、すなわち登山行為については現在なお未解決のままである。

高井がたびたび登山行為の問題を提起していたにもかかわらず、ナイロンザイルが切断に至った登山行為について、なぜ今まで十分に検討されていなかったのであろうか。それは当時、会の全権を掌握していた石岡は、ナイロンザイルの切断が遭難の直接の原因と考え、ナイロンザイルの究明に集中していた。そのうえ東壁遭難の全容をすべて掌握していたので、遭難に至った登山行為を軽率登山と指摘されることを嫌い、登山行為を公表することを封印し続けたのである。

それで今回、ナイロンザイル切断以前の登山行為、すなわち前穂高岳東壁登攀について検証することになったのである。



Ⅲ 前穂高岳東壁遭難について

1 岩稜会創立と前穂高岳東壁登攀を目標にするに至った経緯

検証をするに当たり、まず岩稜会創立のいきさつと前穂高岳四峰正面新村ルートと東壁の積雪期初登攀を目標にするに至った経緯について触れておく必要がある。

昭和20年8月15日、太平洋戦争が終結し、海軍から復員した石岡は、鈴鹿

市にある旧制神戸中学の物理の教師として赴任してきた。同年秋、生徒の要望で石岡が部長となって神戸中学に山岳部ができた。翌21年4月、山岳部の卒業生を中心に約40人が会員になった岩稜会が民間の山岳会として鈴鹿市に誕生した。

昭和22年7月に、本田と松田により屏風岩中央カンテ初登攀が成し遂げられ、昭和25年5月に、石原一郎（以後石原兄とする）と松田は明神岳五峰東壁積雪期初登攀に成功した。

屏風からはじまった登攀目標に一応の区切りがついたので、また石岡は歳でもあるので引退して会を指揮するリーダーとなり、昭和27年に石原兄(山口高商・九大)が跡を継ぐことになった。とはいっても会長は石岡で、いつまでたっても教師と生徒という関係は払拭できなかった。

昭和27年5月に、松田と高井は前穂高岳四峰正面甲南ルート積雪期初登攀に成功した。

石原兄の指導のもと、このような業績を積み重ねていくうちに、会はより困難な登攀を目指すようになり、昭和29年12月には前穂高岳四峰正面新村ルートと東壁の積雪期初登攀を目標することになった。会の発展の勢いから考えれば当然の流れであり、それと同時に会長としての石岡の力は増大していった。

2 前穂高岳東壁遭難の概要（登攀記録は澤田報告書より抜粋）

昭和29年9月4日、岩稜会総会で前穂高岳正面岩壁と東壁を攻撃目標とする冬山合宿の計画¹²⁾が承認された。

29年11月、石岡は熊沢氏よりナイロンザイルの説明を受け¹³⁾、12月石岡は大枚をはたいて直径8ミリのナイロンザイルを購入した¹⁴⁾。

澤田が熊沢氏のところでナイロンザイルを受け取り、澤田の自宅の畳のある玄関で、ラシャバサミを使って80mのナイロンザイルを切って40m 2本にした。（澤田兄の話では100mのナイロンザイルを40m、30m、30mに切ったとのことであった）

合宿参加者¹⁵⁾は、石原一郎(31 津島商業高校教諭)、上岡謙一(34 自営)、松田武雄(24 中部配電・鈴鹿勤務)、室敏弥(24 自営)、北川たづ子(29 中部配電・津勤務)、高井利恭(22 宮川ダム開発事務所勤務)、森泰造(21 自営)、石原国利(24 中央大学経済学部4年)、澤田栄介(21 三重大学農学部3年)、太田清嗣(19 法制大学1年)、南川治資(22 三重大学農学部4年 主将)、高井吉史(三重大学2年)、若山五朗(三重大学学芸学部1年)の13名である。南川、高井吉史、若山の3名は三重大学山岳部所属である。

（ほとんどの会員が、若山は三重大学山岳部員であって岩稜会会員と認識していなかった。遭難後、石岡が独断で岩稜会会員にしたものと思われる）

29年12月22日、石原、澤田、若山、南川が名古屋を出発した。³⁾⁴⁾¹⁵⁾

29年12月24日、石原兄は名古屋の石岡宅に泊まり¹⁶⁾、合宿についていろいろと検討をした。翌25日、石原兄は名古屋を出発した。¹⁵⁾

29年12月28日、奥又白にベースキャンプを設営し、翌29日に荷揚げが完了した。³⁾⁴⁾

29年12月31日、あいにくの雪となる。高井兄弟が到着する。東壁の攻撃隊員が石原、澤田、若山と石原兄から発表された。「若山も連れて行ってやってくれ」と。

30年1月1日、前穂高岳東壁登攀。³⁾⁴⁾ (以下登攀記録は澤田報告書より抜粋)

午前3時起床。

出発前「昼までに第二テラスに着かないときは引き返すこと」という石原兄の指示が石原に出される。それを高井が訊いていた。

午前6時、石原、澤田の三人はベースキャンプを出発する。

午前7時10分、インゼルの中程でご来光を仰ぐ。

午前7時30分、B沢上部でアンザイレン。石原、若山、澤田の順。

午前8時00分、北壁に取り付き、Dフェース基部に沿って1ピッチ登り、4mのクラックからチムニーの基部に入る。アイゼンのツアッケきかず思わぬ時間を浪費する。6mのチムニーを登る。

午前11時00分、雪のリッジに出て、急斜面のスノーリッジを1ピッチ半登る。第二テラスへ抜ける40mの岩壁に向かう。右側のフェースを登り、チムニーに沿って5m登るとオーバーハングとなる。石原はオーバーハングを乗り越えた後、チムニーの左側へトラバースする石原の姿が現れ、大きく回りこんで第二テラスの末端の雪の斜面へ姿を消した。石原と若山のザイル間隔を30mとする。

午後1時50分、石原から「アラヨッ」のコールあり。大阪市大から激励を受ける。若山オーバーハング越せず。オーバーハングの乗り越しに力尽き、そのままズルズルとチムニーへ滑り落ちた。澤田はハング下まで登り、若山を肩車でオーバーハングを越させる。

午後2時50分若山と澤田は第二テラスに到着する。

午後3時10分、Aフェースの下に着き、昼食をとる。

午後3時30分、Aフェースに取り付き、右側のルートに登り、1ピッチ後、細かいクラックでハーケンを2本打ってアブミを使って登る。スラブ状の岩に雪がつき、今にも崩れそうな所を慎重に登る。

午後5時30分、視界きかず、頂上直下30m地点でビヴァークと決定する。

午後6時00分、粉雪舞う。ビヴァーク完了。昼食の残りを噛みしめる。

30年1月2日、午前8時、左側のスラブ状のところを4m登るが引き返す。右側のチムニーに取り付き、2m上に岩の突起があり、さらに3mのところにはオーバーハングをなす突起がある。ハング下まで登り突起にザイルをかけて登ろうとするが、石原は乗り越せなかった。

午前9時20分、ミッテルの若山がトップとなり、突起にザイルをかけたまま右側岩壁にトラバースして直登にかかる時、右足を50cmスリップし、ナイロンザイルが切断して墜死した。(澤田は右足と記載しているが、石原は左足としている)

「ヤッホー」を連呼して救援を依頼し、ビヴァーク地点に戻る。

午後2時30分、高井と連絡がとれたのでアップザイレンをやめてビヴァーク地点に戻る。

午後4時30分、救援隊来る気配なく、不安が募る。

午後5時30分、ビヴァークを覚悟する。

30年1月3日、午前4時頃、目が覚める。

午前9時00分、もう一度チムニーに取り付く。

午前10時20分、奥又白の上部斜面にラッセルの跡を見つける。

午後2時40分、高井がアップザイレンで降りてくる。石原から左側のスラブ状のところを登る。

午後5時10分、ベースキャンプに戻る。

IV 遭難原因の追及—登山行為の検証—

1 石岡は「岩稜会員に告ぐ」¹⁷⁾の中で遭難の原因は二つ、と分析していた

石岡は過去の登攀についてはことごとく詳細な記録を残しているのに、私が渉猟し得たこの登攀に関する記録は、印刷物「ナイロンザイル事件」¹⁾の中にあるわずかの記事と「岩と雪1」²⁾の記事と沢田栄介³⁾⁴⁾の三重大学山岳部会報の記録だけである。新聞報道の記事も石岡が発表したものだけである。会の詳細な登攀記録が存在してないのが不思議だった。

本件発生当時の状況

前穂高岳東面の削壁(200m前穂東壁と通称す)の登攀は今冬合宿の三つの目的の一つであったので、元旦の快晴を好機到来として石原、若山、澤田の3名は午前6時又白池畔のテント(標高2500m)を勇躍出発、8時東壁に取付いた。前記の順にザイルをつなぎ登攀を開始したが、意外に時間を要し登攀完了の約40m下の地点にて日没となった。なお、この頃から天候悪化⁰して降雪となった。3名はツェルト(羽二重製の袋)を被って狭い氷の棚で夜を

かした。翌午前7時半、甚だ元気に再び登攀を開始。石原は図の割れ目を登って(イ)の突出した岩にザイルをかけ、その往復二本のザイルを握って突起の上に出ると3回試みたが、ザイルが握る指の中でずるずる滑ると、力不足とで成功せず、ザイルにつかまっただまま棚に下り先頭を若山と交代した。若山は(石原とザイルを結ぶ順序を交代した後)

直接(イ)に登らず右手の壁に取付いた。この時の状態は石原の記憶によれば、図のようであった。(石原は自分もその前に上っており、かつ確保すべき先頭者を注意深く注視していたので誤りはほとんどないと言っている)その時、若山は「アッ」と言って左足を滑らし、矢印の方向に時計の振子のように落ち、ザイルは切断し、石原の腿に当たって瞬時にして見えなくなった。この時ザイルを握って若山を確保していた石原にはショックは殆どなかった。(後で2名は大声で叫んだが下からの反応はなかった。二人は生命綱であるザイルのあまりの脆さに登攀の自信を失い、ここで救援を待つことになり、再び第二夜を風雪の中に明かし、翌3日午後救出され、暗くなってテントに戻った。

この石原報告が岩稜会の公式見解である 登攀記録は非常に簡単なものであった

石岡は遭難当初よりナイロンザイルの性能に着目し、ナイロンザイルの欠陥究明に着手した。一方、登攀についてはごく簡潔に、しかも最低限の発表に留めていた。皮肉なことに篠田軍治から「この事件は岩稜会が遭難に関する発表をおこたり、外部から原因究明に立ち入って騒いだような感じですね。岩稜会は例えば機関誌上をかりてでも、計画自体に無理がなかったかどうかなど見当すべきでした。・・・」¹⁸⁾と指摘されていた。

でも実弟の若山を失った石岡は「自分は遺族だ、被害者だ」という意識が大きく作用して、石岡に不利になるものはすべて握りつぶしたので詳細な登攀記録がないのは当然の結果であった。石岡ははじめから高井の意見にも耳を貸さず、事件を総括し、記録を残すつもりはなかった、と言える。岩稜会の歴史の中で唯一登攀記録が存在しない暗い事件となってしまった。

昭和33年当時は「ナイロンザイル事件」の追及と「穂高の岩場」の発刊が会の二大目標であった。石岡はその指揮をとっていたが、思うような進展が認められなかったので会員に檄を飛ばしたのである。それが「岩稜会員に告ぐ」(石岡は岩稜会会長の肩書で発表しているが、岩稜会会長に復帰¹⁹⁾したのは昭和34年8月30日である。この時点では岩稜会会長という肩書は使えないはずである)という警告書であった。

ところがその中で石岡は暗に前穂高岳東壁遭難原因を二つ指摘していた。一つは「なぜ漫然と新人にトップを交代したのか」、もう一つは「なぜリーダーの指示を守らなかったか」である。理由は定かでないが、石岡は氏名を公表していない。固有名詞を出さずに記載したので抽象的表現となり、この意味を理解

できたのは石原兄弟だけで、ほとんどの会員はいつものバックカスの戯言と
思っていたのであった。しかしこの記事の中の登攀リーダーとは石原を指し、新人
とは若山を指しているのは確かである。後日、石原は「この記事は私のこと
である」と認めた。石岡の遭難に対する赤裸々な心情が吐露されている。

次の大目標を定めるときには、まず計画の当初において、リーダーとか、本
会においては幹事会に諮ってよく検討の上、リーダーの決定によって行うのが
当然であって、今回のように一人の者が考え、それを一部の者に話し、リーダ
ーに知らせることなくその準備をし、既成の事実にしてしまうやり方はまっ
たくいけない。こういう前例はチームワーク破壊のもとであり、もとより危険な
ことである。誰も彼もそういうことをしたならばどうということになるか、考
えてみるまでもないことであり、今後二度と繰り返されてはいけないことである。

以上のことは単に技術があるという長所のためすべてに優れているかの如き
ウヌボレによって起きることが多い。このウヌボレが人間を無反省にする。
登山は技術だけではない。人の生命をあずかるのである。3年や4年の経験では
不十分である。又、技術がうまいということは、他の人間との比較でいえるこ
とである。従って人間が登ったルートならいつも登れる。だから俺は無敵だと
ウヌボレルようになる。人が登ったことのないルートでは登れるかどうかはま
るでわからない。そういう時にこのうぬぼれは危険である。こういう者を困難
な登攀のリーダーとすることは遭難の可能性がある。今までの登山史がそれを
示している。自分が登れなくなるとこのうぬぼれが急に破れるため理性の判断
を欠き、自分でも登れないというその困難な場所へ力のない新人を漫然とトッ
プに立てるといような決定を行うことになるのである。リーダーは、技術よ
りも経験があり、メンバーの意見を虚心にきき、正常な理性を失うことなく、
人の和を主とし、安全を旨とするものでなくてはならない。ましてや今回述べ
ているようなことで認識不足をおかしているうちはどうていその資格はない。

また、リーダーは困難な場面に立ちいたって進むか退くかを考えるとき、会
員の中で安全な方を主張する者があれば、自分は登るべしと思っても安全な方
の主張に従って決定を下した方がよい。万一自分の判断に誤りがあるかもしれ
ないからであり、もし誤れば死であるが、一方安全な判断に従っておけば誤っ
ても登れなかったというだけで済むからである。また次の機会を狙えばよい。
例えば次の目標を右岩稜にしたような場合、登攀のリーダーとなる者は、この
点をとくに留意しなくてはならない。要するにリーダーは、自分は人間である
以上、自分の判断は必ずしも正しいとはいえないこと、又かならず遭難しては
いけないことを常に考えていなくてははいけないのである。

(岩稜会員に告ぐより抜粋)

①「岩稜会員に告ぐ」が出されたときの会の動向

ではなぜここまで石原をターゲットにして責め立てなければならなかったのでしょうか。これは石岡と石原の人間関係が大きく関与していると思われる。そこで遭難から「岩稜会員に告ぐ」が出されるまでの岩稜会と石岡そして石原の動向を検討することにする。

昭和30年1月2日、遭難発生し、同年5月と同年夏には会の全力を投入して遺体捜索にあたった。その結果、昭和30年7月31日、若山の遺体が発見されたので捜索は一段落し、ナイロンザイルの欠陥究明が本格的になった。

昭和30年12月24日、岩稜会は臨時総会²⁰⁾を開催して蒲郡事件の追及を会の目的にすることを正式に決定した。

石原は当時の様子を次のように語った。

「その当時、会の登山活動は停滞していました。昭和30年の冬山合宿は木曾駒ヶ岳で行われましたが、およそアルピニズムとはかけ離れたもので、私はこの合宿に納得できなかったのです。

それで昭和31年2月、私は『私たちが遭難した結果、会の登山活動が停滞したのであれば大変申し訳ありません。でもナイロンザイル事件もほぼ見通しが立ったので、本来のアルピニズムに沿った登山活動をすべきではないでしょうか』という内容の手紙を石岡に送りました。

それが石岡の逆鱗に触れ『君だけが生き残っていい思いをしようとするな』という返信が届きました。私は愕然としました。心は動揺し身震いを覚え、頭は真っ白になりました。夜行列車に飛び乗り名古屋に向かいましたが、途中気持ち悪くなり熱海で下車して気を鎮めました。列車を二つほど遅らせて再び名古屋に向かいました。伊藤経男さん(岩稜会副会長)に付き添ってもらい石岡さんに謝罪し、手紙を返しました。

『昼までに第二テラスに着かないときは引き返す』というリーダーの指示を守っておれば、五郎君は死ななかつたし、トップを五郎君に交代しなかつたら、五郎君は死ななかつた、という思いが石岡さんの心の中にあることが話の随所にうかがわれました。しかし石岡さんはこのことを決してズバリ言うことはありませんでした。それだけに私の心は痛み、重圧となりました」

昭和31年6月の訴訟では、石原が原告となって篠田軍治を名誉毀損で告訴²¹⁾²²⁾²³⁾したのだが、結果は不起訴²⁴⁾となった。しかしこの訴訟を指揮したのは石岡自身で、石原は名誉毀損で訴訟を起こすとは思ってもいなかったという。石原は石岡の意のままに利用されたのである。

一方、澤田の父は石岡の訴訟の進め方に同意できず、訴訟から降りることになり、澤田も石岡と距離をおくようになった。

その時の経緯について兄の澤田寿々太郎が次の一文をよせてくれた。

「50年以上前の話なので正確を欠くかもしれないが、父は名誉毀損の場合、誰が原告なのか、当事者は死亡しているではないか、むしろザイルに欠陥があったことに原因があり、大切な弟の命を奪ったのだから損害賠償が妥当ではないか、と父が勧めた。しかしバッカスは頑として同意せず、『社会正義のため名誉毀損でいきたい』と。それに対し父は社会正義のためであって金のためでないなら賠償金を1円でも100円にでもしたら良いではないか、と言ったが、バッカスは聞き入れない。父も『石岡君、これは告訴しても多分不起訴になると思いますが』といって考え直すように勧めて別れていった。

私の推察するところ、バッカスは初めから名誉毀損に決めていて、それに同意してくれる人が欲しかった。その一人として父を選んだのではなかったろうか」

また石原は東海支部報 No110 の石岡繁雄氏追悼号²⁵⁾の中で、就職の経緯を次のように述べている。

「昭和31年の岩稜会の夏の合宿中のことであった。『穂高の岩場』の撮影とナイロンザイル事件が同時進行中であった。私にとっては在学最後の夏休みで、来春の就職を決める時であった。石岡さんとテントで二人になったとき石岡さんは『ナイロンザイル事件、穂高の岩場を手伝ってほしい』そして『名古屋大学の事務局に来ないか、そしてヒマラヤに行かないか』と言われた。私は即座に『そうします』と答えた」

しかし石原の本来の希望は普通のサラリーマンになることであったが、「君だけ生き残って・・・」という石岡の言葉が絶えず頭の中をよぎり、「石岡さんに誘われれば断れる状況ではなかったので同意せざるを得なかった」と打ち明けた。まさに「顔で笑って心で泣いて」という心境であったのであろう。

そして石原は就職後の状況を次のように語った。

「昭和32年4月、私は石岡さんのお世話で名古屋大学学生部学生課に就職し、石岡さんの所に下宿していました。山(穂高)にも行けず、御在所にも行けない軟禁状態でした。それでその年の秋、都通の方へ下宿を代わりました。兄の石原一郎も名古屋にいた頃でしたが、ヒマラヤ登山の気運が勃然として興ってきました。アルピニズムに沿った登山活動をしてヒマラヤ登山を目指そう、とする私たちの動きに気付いた石岡さんは激怒しました。それで私たち兄弟を攻撃したのです。それが『岩稜会員に告ぐ』となって出たわけです。兄は『岩稜会員に告ぐ』を読むなり憤慨して投げ捨てました。以来石岡さんと兄の関係は悪くなってしまいました」

また昭和31年から34年にかけて「穂高の岩場」を作るにあたり、写真撮影のために既成ルートに登ることとアルピニズムはどうかかわるのかの狭間で、石原国利は石岡の方針通りに動かざるを得なかったのである。その結果石原と澤田が中心になって「穂高の岩場」のほとんどの写真撮影を行った。

昭和34年4月から5月にかけて、石岡の呪縛から逃れるかのように石原は前穂高岳四峰正面松高ルート、前穂高岳三峰フェース、前穂高岳四峰北条新村ルート、前穂高岳東壁右岩稜²⁶⁾を筑豊山の会の渡部、柿本と登攀している。事前に石岡には登攀のことをなんら連絡しなかった。これは石岡の警告に違反していたのである。しかし登攀後に石岡からなんら咎められることはなかった。むしろ好意的に右岩稜のデータを「穂高の岩場」²⁷⁾に掲載してくれたという。これを契機に石岡から指摘された「ウヌボレ」を打ち消すかのように、より困難な登攀を求めていった。

昭和35年3月から7月まで石原はジュガール・ヒマール遠征隊に参加し、マディア・ピークに登頂²⁸⁾²⁹⁾した。帰国後に明神五峰赤壁中央ルートの初登⁵⁵⁾に成功したが、いつまでも「君だけ生き残っていい思いをしようとするな」という石岡の言葉はつきまとっていたのである。

② 遭難原因(1)一力のない新人を漫然とトップに立てた一

イ) 関係者の証言

今回の検証にあたり「なぜトップを若山に交代したのか」と石原国利と沢田に訊いてみた。

a) 石原証言

ビヴァークの翌朝、前日のザイルオーダーにて私が上部岩壁の登攀を開始しましたが、前日終日ピッケルを使っていた疲れで右腕が思うように動かず、頭上の岩(ザイルをかけた)の上に上がることができませんでした。そこでセカンドの若山とトップを交代しました。交代はそのときの成り行きでした。

b) 澤田証言

翌日、夏のルートに登り始めましたがスノーシャワーがひどかったために右横の岩のルートに登ることになったわけです。石原国利は腕力がなく登れませんでした。石原国利は腕力登攀と考えていたので、横にいた若山にトップを交代したのです。私は壁に向かって一番左にいました。

ロ) 石原は登攀リーダーか、それとも三人は「横の関係」か

「氷壁・ナイロンザイル事件の真実」の中で相田は次のように記述している。

東壁アタック隊三人のうち石原国利さんは一番年長だということで、一応パーティーのリーダーとされていたが、「三人は上下の関係ではなく、横の関係で

した」と、語っている。³⁰⁾

石岡が石原をリーダーと認めていたことは、「岩と雪」1に次のように記載されている。

石原は一行のリーダーであったことから、死因に関し遺族から告訴されるといふ事態が発生しないでもない。(リーダーが過失致死罪で起訴され、37年7月4日罰金3万円の判決をうけたという事件がある。芦別事件)³¹⁾

おそらく石原は「岩稜会員に告ぐ」の「ウヌボレルような者を困難な登攀のリーダーとすることは遭難の可能性がある」という石岡の指摘を意識して「横の関係でした」と発言したのであろう。そして「私はリーダーではなかった」と言いたかったのだろうか。

そこで石原に「横の関係とはどのような意味か」と訊いてみた。

「困難な目的のために編成されたチーム(ザイルパーティー)はチームを編成するメンバーの技術と相互信頼が基本で、リーダーを頂点とした命令系統ではありません。一人ひとりが独立したクライマーで、それぞれが自己の責任で判断します。リーダーを作っていちいちリーダーと協議して登るのではないし、リーダーの言う通りに従って登るではありません。自ずからリーダーの役割が決まっていく流れの中で、自ずからその場でリーダーは決まっていくのです」と石原国利は語った。

続いて石原に「リーダーではなかったのですか」と尋ねたところ、次のような一文をもらった。

「澤田、若山、石原はサポート隊(四峰アタック隊の)の中から選ばれて前穂東壁登攀チームを編成した。その際明確なリーダー、サブリーダーの指名は行われていない。強いて言えば最年長で当初トップで登った石原がリーダー的立場であった。対外的にはリーダーでよい」

でも三人の登攀歴を比較すれば石原や澤田と若山の差は歴然としており、石原と澤田は「横の関係」であっても、石原・澤田と若山はどうみても「縦の関係」である。

澤田は「若山はあれほど下手とは思わなかった」と認めているし、石岡でさえ実弟若山を初心者と認めているにもかかわらず、なぜ石原は「若山とは横の関係であって、若山は初心者ではない」とかたくなに主張するのであろうか。

若山を初心者と認めると石原の意見の整合性がなくなるからではなかろうか。でもどうみても若山は初心者で、石原・澤田とは「横の関係」ではなく、「縦の関係」である。

高井は「過去の会の登攀でリーダーとかサブリーダーを指名して登攀をしてはいない。そのパーティーの年長者もしくはトップに登る者が自然とリーダーとなっていた。東壁の場合は石原がリーダーである」と語った。

石原もまたこのパーティーのリーダーであると自認しており、若山は大学山岳部に入部してから1年足らずで、経験不足の初心者といえる。

だから石岡が「漫然と初心者の若山にトップを交代したことは、石原の重大なミスである」と指摘するのも当然である。

「なぜ若山にトップを交代したのか」という石岡の質問に対して、「横の関係でした」では石岡は納得できないであろう。石原の誠に都合のよい言い訳に聞こえて、責任回避の言葉と受け留められてもしかたがない。

ハ) なぜ澤田はトップを交代しなかったのか

あと30mで完登という勝負のかかった重大な局面で、石原が登れないとなれば、ここを登攀できる可能性のある者が交代して登るのが当たり前である。とすれば澤田しかいない。なぜ澤田は「俺がやる」と交代を買って出なかったのだろうか。また石原は澤田に交代を勧めなかったのだろうか。不思議でならない。澤田からも明確な返答が得られなかったのは残念である。

初登攀の成否のかかる30mの地点で、力のない新人の若山に「まあ、やってみな」といえる問題ではない。石原が登れないところを漫然と初心者の若山にトップを交代したことは、石原の重大なミスである。さらに澤田は傍観していて、若山が初心者で技術未熟なことを知りながらトップの交代を容認したことも重大なミスと言えよう。

ニ) 「上下の関係ではなく、横の関係でした」という発言に対する高井の見解

「初登攀の成否がかかっている最後の30mは澤田が変わるべきで、初心者が登る理由はみあたらない。若山の参加によって登攀が遅延している。石岡が厳しく指摘するように、自分が登れないところへ技術が劣る若山を登らせることは間違っている。技術が上の澤田が登攀しなければならない。澤田は傍観せずに進んで登るべきであった。澤田に六分の友情があれば、代わってやるべきではないか。石原はなぜ澤田に勧めなかったか。これは縦横の関係以前の問題である。

初心者の登攀を速やかに進行させ、かつまた安全上からも若山をミッテルにしたはずであるから、オーダーを変更することはあり得ない。ミッテルであれば、仮にザイルが切れても死亡に至らない。

石原国利の自己の立場からは横の関係になるが、石岡は初心者を横の関係と容認しない。トップを初心者に交代させて遭難は起った。

初登攀にはそれぞれが力を出し切って登るのだからあまり考える余裕はない。寄り合い所帯のバリエーションには個性的な人間が多いが、概して他人に冷淡、他人を振り向かない。パーティーにとかくの問題が伺われるのもここに由来し

外
出
の
理
由
を
問
う

ている。しかるに、当然のことながら弱い者に寛大で暖かさという人間には倫理がある。人命に係わりなおのことである。石岡が石原たちの心の内を見誤ったのは不幸であった。社会通念を期待したのが誤りであった。

同じパーティーに隊の足まといになったり、マイナスになるのは隊の編成の問題だ。若山には向かなかったということになる」

ホ) 「若山のトップの交代」は重大な遭難原因

石岡は「なぜトップを若山と交代したのか」と石原に執拗に問い続けてきた。チーフリーダーの石原一郎を叱責することはほとんどなかったのに、石原に対しては激しい非難を浴びせている。石岡の怒りは「トップをなぜ若山と交代したのか」の一点に集中している。

石岡は、若山がスリップしたことを棚に上げ「トップを若山に交代させた石原が悪い。なぜ石原が登れないところを新人の若山に登らせたのだ。若山がトップに交代しなければ死ぬことはなかったのに」と石原を責めたのであった。実に明確な分析である。

一方澤田はなぜ非難されなかったのだろうか。不思議である。また石岡は全然若山のスリップも非難していない。弟だから非難できなかったのである。

でもスリップするような技術未熟な若山をアタックメンバーに選んだのは他ならぬ石岡自身ではないか。これこそ理性を欠いた判断である。東壁遭難について石岡は何ら反省することなく、会員に反省を求めたのである。会員は何を反省すればよいのか。石岡は不条理を会員に求めたのである。

石岡—高井会談で「岩稜会員に告ぐ」を話題にしたが、石岡は「まずかったか」の一言で多くを語ろうとしなかった。

さらにつきつめれば石原が「リーダーの指示」を遵守しておれば遭難は起こらなかった、と石岡は思い、若山にトップを交代させた石原を非難することにより、新人で技術未熟な若山をアタックメンバーに加えた石岡自身への非難がかわされると考えたのではなかろうか。責任転嫁といわれても仕方がない。

石原は知っている

③ 遭難原因(2) 石原一郎リーダーの指示を石原国利(石原一郎の弟)が無視

イ) 石原一郎チーフリーダーの指示とは

ではいったい奥又白合宿備忘録の石原一郎チーフリーダーの指示とはどのようなものであったのだろうか。

高井の書簡では「昼に所定の場所に達しなければ登攀を中止するように」と記載されている。高井はこれ以上思い出せなかったという。

書簡を見せてもらった時、『昼に所定の場所に…』と漠然とした記載になっていたのも、私はもっと確実な石原兄の指示に関する情報を捜しまわったが分か

らなかった。

しかし今回「奥又合宿備忘録」なるものがでてきて、きちんと指示が記載されていた。その第 12 報・室一談⁹⁾で会員の室敏弥が救助から戻ってきて「昼までに第二テラスに着かねば引き返すことになっていたが」と語っていることから、石原兄の指示の存在は明白となった。

石原兄の指示を登攀者の石原は「覚えていない」と、沢田は「訊いていない」といっているが、備忘録から分かるように「指示」は存在していたのであった。

この石原兄の「指示」は昭和 30 年 1 月 1 日の朝、石原に伝えられ、それを高井が聞いていたのであった。遭難後、奥又白のテントで石原兄から連絡役の室へ、室から上高地の石岡へ伝えられ、1 月 5 日の夜、室が鈴鹿に戻ってすぐ上田に伝えたのであった。そしてこの指示が「奥又白合宿備忘録」に記載されたのである。

しかし石岡は遭難のすべてを知り尽くしていたので「リーダーの指示」については触れられなくなかったのだろう。そして 50 年もの間、高井の発言を封じ続けたのである。

平成 18 年 10 月 1 日、高井は石原翠子(石原一郎夫人)に「遭難当時のことを何か訊いていませんか」と電話で尋ねたところ、「誰と話をしていたときか忘れましたが、昼までに第二テラスに登れなかったときは、お前たちはまだ未熟だから降りて来い、という話しをしていたのを訊きました」と、か細い声で話してくれたという。彼女はこの言葉のもつ重みをまったく理解していないようだった、と高井は語っていた。

その後の石原翠子の話では、「国利が言うことをきかなかったからだ」と石原兄が喋っているのを何度も訊いたという。

やはり石原兄は指示を無視されたことをよほど悔しく残念に思っていたのであろう。「リーダーの指示」は存在していたのである。

奥又合宿備忘録からも分かるように石岡は当初より「リーダーの指示」を知っていたし、平成 18 年 5 月 7 日の石岡-高井会談でも「指示」の存在を認めたのであった。そして会談後の平成 18 年 4 月 15 日夜、石岡は遭難から 50 年経って初めて娘の石岡あづみに「リーダーの指示」のこと-「指示」を守っておれば五朗は助かったということ-を打ち明けたのであった。だが「氷壁・ナイロンザイル事件の真実」には「リーダーの指示」のことは何も記載されていないのは不思議である。共著者相田にも「リーダーの指示」のことを伝えてないのではなかろうか。

ロ) 石原がリーダーの指示を無視

石原兄が出発時にベースキャンプでリーダーの指示を出したのは事実である。新人の若山をメンバーに入れたことを考慮しての「指示」であった。そして二人より三人パーティーの方が登攀スピードが落ちることは明白であるにもかかわらず石岡が新人の若山をパーティーに入れたので、石原兄は「昼までに第二テラスに着かないときには引き返す」という保険を掛けたのである(安全配慮義務)。

「なぜ昼までに第二テラスか」と高井に訊いたところ、「A フェースは難しく時間がかかるので第二テラスを目途にして石原兄は指示をだしていたのです」との返答があった。

ところがよく考えてみると、昭和 29 年 12 月 24 日、石原兄が石岡宅に泊まって 17、二人で合宿について話し合った時、まず石岡が若山の起用を石原兄に了承を求め、次いで「昼までに第二テラスに着かないときは引き返す」という指示を二人で検討し合意を得ていたと考えられる。

その理由は、遭難直後、石岡はチーフリーダーの石原兄を全然非難しなかったし、彼の責任を追及しなかったからである。

また高井が石原と澤田を救助して上高地の木村小屋へ戻った時、石岡に「リーダーの指示」について報告したが、まったく取り合ってくれなかったし、詳しいことを聞こうとしなかった。1 月 4 日、先に室から指示のことを訊いていたとしても、もし石岡が指示のことをまったく知らなかったならば、高井からも根掘り葉掘り聞くはずである。指示を知っていたから高井の話を訊こうとしなかったのである。高井は「指示のことを外部に漏らさないようにしている雰囲気だった」と語った。

澤田報告書からも分かるように、若山が登攀の足を引っ張り、石原が指示を無視することになったのである。すなわち、B フェースのオーバーハングで若山がスリップした時はすでに正午を大きく回り、午後 1 時 50 分であった。石原はすでに第二テラスの末端の雪の斜面にいたのであった。沢田は若山のスリップしたことを石原に伝えていなかったという(石原は確保していたのであるからザイルにかかる衝撃で分かったはずである)。

本来は午前 11 時の時点で、「昼までに第二テラスに着くかどうか」を検討すべきであったが、百歩譲って午後 1 時 50 分に沢田は、若山がスリップしたことを石原に伝えて退却するかどうか判断すべきであった。

やはり石原の優れた登攀技術と旺盛な完登意欲があいまって澤田と若山を振り返ることなくどんどんと登攀を継続したことが、リーダーの指示を無視することにつながったのである。そして午後 3 時に第二テラスに着いてから登攀を

継続するかどうか、検討しても遅すぎるのである。

遭難後の鈴鹿での反省会で、石原兄は搜索のやり方で石岡から厳しい批判を受けた。そのとき石原兄が「弟の石原がリーダーの指示を無視して登攀を継続したことが遭難に繋がった」と声を大にして発言しておれば、遭難を総括できたのでなかろうか。しかし石原兄と石原は兄弟であったので、石原兄は弟を非難することができず、石原兄は口を閉ざしてしまったのであった。

そのとき高井も「リーダーの指示」のことを発言したが、石岡から一蹴されてしまった。「石原兄が『リーダーの指示』のことを言い出せる雰囲気ではなかったし、石岡はナイロンザイルの切断が遭難の直接の原因であると考えていたので、登攀については議論するのを意識的に避けていたようであった。しかしこのときちゃんと『リーダーの指示』について議論を深めて責任の所在を明確にしておくべきであった」と高井は述懐している。

また石岡は遭難当初よりこの「リーダーの指示」のことを知っており、後日「岩稜会員に告ぐ」の中でも次のように指摘して石原を激しく叱責している。

「また、リーダーは困難な場面に立ちいたって進むか退くかを考えるとき、会員の中で安全な方を主張する者があれば、自分は登るべしと思っても安全な方の主張に従って決定を下した方がよい。万一自分の判断に誤りがあるかもしれないからであり、もし誤れば死であるが、一方安全な判断に従っておけば誤っていても登れなかったというだけですむからである。また次の機会を狙えばよい。例えば次の目標を右岩稜にしたような場合、登攀のリーダーとなる者は、この点をとくに留意しなくてはならない。要するにリーダーは、自分は人間である以上、自分の判断は必ずしも正しいとはいえないこと、又かならず遭難してはいけないことを常に考えていなくてははいけないのである」

これに対して石原は、「自分が登れるところは他の者も同じように登ることができる、との思い込みがあったのでどんどん登ることだけを考えていたのです。他の人のことも考えて登るべきだったのです。これが悲劇を招いたのです。償えないほど大きな罪です」と述懐した。彼は今なお重い十字架を背負っているのである。

石岡は東壁事件の核心は「石原のリーダーの指示の無視」にある、と断定していたのであろう。それで50年間も高井の発言を封じ、肉親にさえも漏らしてなかったのである。

「高みへのステップ」³²⁾の中では、リーダーの役割について次のように記載

されている。

「登山は強大な力を持つ自然を舞台に自然の変化に対応して行うスポーツである。そのために、まず仲間の安全を第一に考えて行わなければならない。例え登頂という目的が達成されたとしても、仲間の生命を失うような登山は失敗である。残された家族や仲間の悲しみや苦悩は、経験をした者でなければ知ることのできない想像を絶するものだということをリーダーは肝に銘じなくてはならない。

したがって、リーダーの役割の最重点は、仲間の生命を守るためにあらゆる努力を払うことである。そして登山活動中考えられるあらゆる事態を予測・認識し、それらを基に適切に判断してチームの安全を確保し目的の達成に導くことである。そのためリーダーには常に現況を正確に判断する能力が強く要求される」

氷壁ナイロンザイル事件の真実」の中で相田は次のように記載している。

東壁アタック隊三人のうち石原国利さんは一番年長だということで、一応パーティーのリーダーとされていたが、「三人は上下の関係ではなく、横の関係でした」と語っている。³⁰⁾

そこで石原に「横の関係とはどのような意味か」と訊いてみた。

「困難な目的のために編成されたチーム(ザイルパーティー)はチームを編成するメンバーの技術と相互信頼が基本で、リーダーを頂点とした命令系統ではありません。一人ひとりが独立したクライマーで、それぞれが自己の責任で判断します。リーダーを作っていちいちリーダーと協議して登るのではないし、リーダーの言う通りに従って登るではありません。自ずからリーダーの役割が決まっていく流れの中で、自ずからその場でリーダーは決まっていくのです。

縦(上下、階級関係を基本として組み立てられた)関係に対する対語として「横の関係という表現をしました。組織(団体、隊)には目的構成員によって多様な形態がある。あらかじめ定められた決定手続き、命令系統がある場合には、構成員は当然それに従う。未熟者を養成することが目的のチームにおいては、指導者と被指導者、決定者と従属者が存する」と石原は語った。

ついで「今回の合宿では石原兄がチーフリーダーでしたが、石原兄とパーティー(三人)の関係は縦の関係ですか、それとも横の関係ですか」と尋ねた。

「石原兄はその折の合宿全体を統べるリーダーであった。合宿に参加した全員もその認識で参加していた」と石原は語った。

ならば石原はチーフリーダーの石原兄の指示を遵守しなければならなかったのである。

石原（登攀リーダー）が石原兄（チーフリーダー）の指示を無視した結果、仲間の命を失ったのであるから、チーフリーダーの指示を無視したことは、重大な過失である。

50年たった今、石原は「リーダーの指示の存在を認め、リーダーの指示を無視して登攀を継続したことが遭難につながった」と自分の非を認め、きちんと事実を開示すべきである。石原は石岡の庇護の下にあり、石岡と一身同体といえよう。石岡の懐の中にすっぽりと入り込み、すべてを石岡に委ねていたのである。石原が事実を開示せずにいると、石岡と同様、軽率登山をナイロンザイルに転嫁したと見做されてもしかたがない。

2 新たに浮上してきた遭難原因

遭難原因(3) 石岡の若山起用

石岡が指摘しているように東壁遭難の直接の原因は「トップの交代」と「石原のリーダーの指示の無視」である。しかしその誘因となったのは若山の起用である。では誰が若山を起用したのだろうか。

① 登攀隊員決定の経緯

ベースキャンプで石原兄が登攀隊員を発表したのは事実である。

「国利、澤田。そして五朗も連れて行ってやってくれ」と石原は発表したであろう。

この発表で石原も澤田も初めて若山と一緒に登ることを知ったのであるが、澤田は、若山は用事があって元日に下山の予定であることを聞いていたのでこのほか驚いたことであろう。

澤田証言から推測すると「東壁は岩稜会の計画である。三重大学山岳部の合宿は奥又までで、それ以上のものではない。なのに岩稜会会員でない若山をどうして連れて行かねばならないのか」と澤田は異を唱えたのではなかろうか。澤田が詳細を語らないので、そのとき石原兄と澤田の間でどのような議論がなされたかは定かでない。

また「自然に決まった」という石原証言は、もっと歯切れが悪く納得し難いのである。積雪期の初登攀を狙っているのに、登攀隊員も決めずに登攀することはまずあり得ない。

一般的には積雪期の初登攀のルートに登るのに、それに見合った力量の者が夏にトレースして、トレーニングを重ねて臨むことになる。石原と澤田は昭和29年夏、東壁に登攀しているのに登攀隊員に起用されても異論はなかろう。

合宿の攻撃目標が四峰正面北條・新村ルートと東壁と決まっておき、「主目標は北條・新村ルートで、松田と高井が登ることになっていた」と澤田が証言し

ている。なのに東壁攻撃隊員が決まっていけないというのは極めて不自然である。

では東壁の登攀隊員はどのようにして決まったのであろうか。

「計画段階から東壁は石原と澤田と決まっていたのではないのですか」

と石原に尋ねたところ次のように語った。

「私たちは本隊のための先発隊です。ボッカですよ。学生こそ早くから入山できなかったの、私たちが先発して山に入ったのです。主体はあくまで四峰正面ですよ。荷揚げも設営も順調に進み、本隊が到着まで時間があつたので東壁の登攀がごく自然に決まったのです」

澤田にも同じ質問をしたところ次のように話してくれた。

「われわれが初めから冬山の準備を進めていたのです。荷揚げをし、設営して本隊（四峰正面）の来るのを待ったわけです。荷揚げも設営も順調に進み、四峰正面の本隊が来るまで時間が空いたので、12月31日に東壁に行くように部隊長（石原一郎）から指示がでたのです。夏に石原と私は東壁を登っていますので、部隊長は国利と私を東壁に登らせてやりたい、と欲していたのです。登攀隊員発表のとき『五朗も連れて行ってやってくれ』と部隊長は言ったのです。若山は元日に下山すると言っていたのに、と不思議に思いました。バッカスと部隊長の間で話があつたのではないのでしょうか」

「五朗も連れて行ってやってくれ」とは、石原兄の言葉であるが、「東壁は石原と澤田と決まっているのだが、この際、五朗も一緒に連れて行ってやってくれ」と解することができる。おそらく昭和29年12月24日、石原兄が石岡宅に泊まった時に、石岡から「五朗も連れて行ってやってくれ」と頼まれた言葉をそのまま伝えたと思われる。というのは会員の誰もが認識していたように、石原兄も東壁に石原と澤田の起用を決めていたのであるが、石岡から「五朗も連れて行ってやってくれ」と頼まれたので若山を起用することになったのである。

「隊員を誰にするかはきわめて重要で、その日になって、そのときの気分で決めることはしないし、石原兄の堅実な性格に合わない。ましてバリエーションで。たとえ伝えたのが石原兄であっても彼が勝手に決めてはいない」と高井は断言した。

合宿計画から判断すると、主目標は四峰正面新村ルートであり、もう一つが東壁である。新村ルートのアタックは松田の到着を待って行われるのだから（松田は1日に神戸を出発している）、少なくとも1月4日以降となる。もし東壁の攻撃が本隊到着後に行われるとすれば、合宿参加のメンバーと本隊到着後のメンバーから判断すると、東壁に登攀できるのは室と森しかいない。でも二人とも東壁を登っていないし、室も森はサポート役だったと証言していることから、当然夏に東壁を登っている石原と澤田ということになる。だから彼らは早くから

荷揚げや設営に汗を流し、口にこそださないが密かに東壁の ATTACK を狙っていたと考えられる。否、登るつもりでいたのである。

昭和 29 年 12 月 28 日に BC が設営され、翌 29 日には荷揚げが完了し、本隊到着まで 5 日間もあるのに無為に過ごすことはない。厳冬期の穂高の好天は少ない。東壁攻撃のために好天を待っていたのである。誰の目から見ても東壁を登攀するためのスケジュールであった。

これを裏付ける石岡の談話がある。

「四峰正面の攻撃に先立つ東壁の冬期初登攀の決行とその日時は、石原一郎君が現地の気象状況、メンバーの登攀技量、体力から決めたんです・・・」という石岡の談話から判断すると、本隊が到着してから四峰正面の攻撃は行われ、東壁の攻撃は四峰正面の攻撃に先立って行われる計画である、と読み取ることができる。すなわち本隊が到着するまでに東壁を攻撃するように決まっていたのである。だから石原らは早くから入山して荷揚げや設営を黙々と行った。そして石原兄は石原らの東壁攻撃に合わせて本隊よりも早く入山した。石原らが単に荷揚げや設営だけ行うのであるならば、リーダーの石原兄は本隊に合わせて入山すればよい。当初から東壁の攻撃は石原と澤田と決まっていたのだから、それを指揮するために石原兄は早く入山したのである。

一方、石岡は東壁攻撃計画の段階から若山を起用することを計画し、石原と澤田が東壁攻撃隊員であることが分かっていたので澤田にナイロンザイルを持たせたのである。五朗のために大枚をはたいて買ったナイロンザイルを、どこに登るか分からない者に持たせるようなことはしない。

石岡は東壁攻撃のシナリオを独断で作り上げ、昭和 29 年 12 月 24 日に名古屋の石岡宅で石原兄にシナリオを説明して同意を求めたのである。

相田のコメントに「メンバー全員が奥又白に到着していなかったもので、一郎さんは最初に入山して荷揚げを黙々とこなしたメンバー四人の努力に報いようと、この中から東壁の三人を選択した可能性が高い」³³⁾とあるが、荷揚げを黙々とこなした努力に報いるために登攀隊員を決めたわけではない。東壁に登るために石原らは黙々と荷揚げをしたのである。夏に東壁をトレースした石原と澤田と決まっていたところに、若山が加えられたのである。

また相田のコメントには「選抜の『目やす』にしたのは、第一に夏に東壁の登攀経験があることだった、と思われる。石原国利さんと澤田栄介さんがそうだ。次いで、体力と登攀技術。そこで、夏期の東壁登攀の経験はないが、体力抜群で、冬合宿前に鈴鹿の岩場の難所をこなして、石岡さんから『それはすごい!』と、誉められた五朗さんを選んだと思われる」³³⁾とある。

石原と澤田の起用には異論はない。東壁のトレースもしていない若山の体力はいざ知らず、御在所のジャンダルムのトラバースに成功したというだけで若

山が起用されるのは理解しがたい。若山の技術は岩稜会の中で中の下、と石岡から評価されていたのだから。でも石岡は独断で実弟である若山の起用を決めたのである。

澤田は「前穂高岳東壁遭難報告書」の中で「いよいよ好天を待っての体制は整ったのである」と記載し、さらにB沢上部まで偵察にでかけているのである。澤田らは登攀に意欲満々であったことが伺われ、石原と澤田は登攀隊員に決まっていたのである。

昭和29年12月22日、先発隊として石原弟、澤田南川、若山の4名は勇躍して上高地に向かった。明神池養魚所を経て丈余の積雪を踏み分け、又白池宝の木の付近へベースキャンプを設営し、荷揚げを終えたのは29日であった。この間リーダーの石原兄の参加をみ、いよいよ好天を待っての体制は整ったのである。

石原兄弟、澤田は偵察とラッセルをかねてB沢上部まで行く。ここから眺めた東壁下部、すなわち北壁と称する部分は雪もたくさんつき、一見したところ登攀は容易であるとの印象を得たので一同満足な気持ちで天幕へ引き返してきた。

「自然に決まった」という石原証言にいたってはひどく違和感を覚える。50年たった今、なぜ石原も澤田ももつとはっきりと「東壁登攀隊員は石原と澤田だった」と断言しないのであろうか。不思議でならない。

② どのようにして若山の起用は決まったのか

ではなぜ新人の若山が前穂高岳東壁の積雪期初登攀を狙うアタックメンバーに加えられたのであろうか。積雪期初登攀のルートに登るのに残雪期の北尾根を登った経験こそない登攀技術未熟な新人を加えることは極めて異例である。

ではどのようにして若山の起用は決まったのであろうか。

イ) 昭和29年岩稜会総会から

昭和29年9月4日の総会¹²⁾で冬山合宿計画が承認された。攻撃目標¹⁵⁾³⁴⁾は前穂高岳四峰正面新村ルートと東壁である。石岡はじめ会員の間では口にこそださないが、四峰正面新村ルートに松田と高井、東壁に石原と澤田と認識されていた。というのは昭和27年5月に、松田と高井は四峰正面甲南ルートに登攀しているし、昭和29年8月に、石原国利と澤田は東壁に登攀していて、いずれも実績があったからである。

だから石岡は夏から綿密な準備を進め、念入りに計画をチェックし¹⁷⁾²⁴⁾、ナイロンザイルの購入についても熱心に研究して、若山を東壁に起用することを

密かに目論んでいたと思われる。会の全権を掌握していた石岡は、自分の構想の中で登攀隊員を決めることは容易なことであった。

ロ) 石岡と石原一郎の間での事前協議が存在

「五朗も連れて行ってやってくれ」という石原兄の発表と遭難後の状況から判断すると、石原兄が単独で決定したとはとうてい思えないふしが多々見受けられる。それで人選に関して事前協議があったのではないかとと思われるので検討してみた結果、次の四通りが考えられる。

- (a) 石岡と石原兄の協議なし—石原兄の単独決定
- (b) 石岡と石原兄の協議あり—若山を登らせないでくれ (石岡の依頼)
- (c) 石岡と石原兄の協議なし—石岡単独決定 (石原兄に事後承諾)
- (d) 石岡と石原兄の協議あり—若山を登らせてくれ (石岡の依頼)

(a)と(b)の場合は、石岡に了解なく若山を登攀隊員に起用した結果、若山は墜落死したのだから石岡は石原兄を激しく非難し、怒り心頭に発することであろう。

(c)と(d)の場合には、石岡は石岡自身に責任があり、石原兄を非難できないのである

「遭難後の動向から判断すると、登攀隊員に関して石原兄は石岡になんら非難されたことはなかったし、沢田事務所での反省会では救助のことで批判を受けましたが、登攀のことで指弾されたことはありませんでした。まして石岡の実家に頭を下げに行かされたとも訊いていません。石原兄はいたって平然とした態度でした」と当時を振り返って高井は述懐した。

さらに鈴鹿市の社会党事務所での反省会で、途中退席した石原兄が「やるだけのことはやった。捜索のことでとやかく言われるのは片腹痛い。バックスにはついていけない」と語ったことから判断すると、「若山の起用」や「リーダーの指示」についても石岡と二人で綿密に検討を加えていたのであろう。

よって(c)と(d)が該当すると考えるのが妥当である。すなわち石岡と石原兄の間でどういう形であれ、事前協議があったことは明白である。恐らく昭和29年12月24日、石原兄が石岡宅に泊った日に¹⁷⁾、石岡が石原兄に「五朗も連れて行ってやってくれ」と頼んだと考えるのが自然である。

ハ) 遭難直後の電報と電話から

昭和30年1年2日「ゴロウ サワダ クニトシ トウヘキ ノボリ フブキノタメ マヨウ」³⁵⁾との電報を石岡は受け取った後、石原兄と電話で話したが、若山の起用を周知している受け止め方であった。その時の様子が「岩と

雪」1に詳しく記録されている。以下「岩と雪」1から引用する。

「島々の警察電話で中継されてくる上高地からのリーダー石原（兄）のときれとぎれの電話を聞いた。

『誰がやられたのだ』

『ゴロチャーン、クニトーシ、（石原の弟）、サワダー』

『どんな様子だ』

『昨晩は前穂高東壁 A フェースでビバーク、昨晩から猛烈な吹雪、救援は不可能』

『まだやられたという確証はないのだな』

『しかし駄目です』

『何故もっと救援に努力しないのか、何故下りて来たか』

『私だけ連絡に下りて来た』

『すぐ出発する。とにかく冷静にやるように』

ぞくぞく集まる家族のひきつった顔。私は居残り部隊を集めて翌早朝出発、その晩の 12 時にふらふらになって上高地の木村さんの家に着いていたのであった」³⁶⁾

この電話の会話から分かるように「ゴロチャーン」と聞いても、石岡は慌てふためいたり怒ったりしなかったのは、若山の起用を知っていたからである。そして1月4日、石岡は見越の実家へ「父上、母上、最大の不幸をおわびします」³⁷⁾と「ゴロウノミ ゼツボウ サイダイノフコウヲ オワビシマス」²⁶⁾の電報を打った。

石岡のいう最大の不幸とは「五朗が墜死したこと」であるが、なぜ詫びる必要があったのであろうか。墜死の原因がザイルであれば（この時点ではザイルの欠陥についてはなんら情報がなかったのである）ザイルメーカーに責任があるし、石原兄が独断で若山を起用したのであれば石原兄に責任がある。

だがザイルメーカーも石原兄も何ら責任を追及されていない。石岡は若山を起用した責任を感じたから詫びたのである。石岡は若山の起用を決めていたのである。

二) 「おはよう日本」から（平成 18 年 7 月 2 日 NHK テレビ）

「五朗さんの前穂高への挑戦が決まった時、石岡さんは当時に絶対安全だといわれていたナイロンザイルを持たせました…」とアナウンサーが報道している。それで平成 19 年 1 月 31 日、NHK 長野放送局の当時取材担当記者の方に報道記事について質問したところ、「石岡さんの説明をそのまま上記のように報道した」とのことである。換言すれば「五朗の前穂高への挑戦を決めた時にナイロンザイルを持たせた」と読み替えることができる。

7 a) 若山の起用を決定し、ナイロンザイルを購入

ではナイロンザイルはいつ購入されたのであろうか。

石岡は「しかし安全には換えられませんから、大枚をはたいて買ったんですよ。80メートル買い、リーダーの石原一郎君ら総勢12人が、40メートル2本持って入山したんです」³⁸⁾と「氷壁・ナイロンザイル事件の真実」の中で語っている。

当時のことを澤田に尋ねてみたところ次のように語った。

「熊沢氏からナイロンザイルはどうかとの薦めがあり、バックスが買い、私がとりに行きました。先発隊の三重大大学の装備を私の家で準備していましたので、そのとき80mのナイロンザイルを2本に切りました。この合宿は四峰が中心でしたから2本にしたと思います」

兄の澤田寿々太郎は「私の家の畳の敷いてある玄関で、栄介(弟)がナイロンザイルをラシャバサミでいとも簡単に切りました。100mのザイルを40m、30m、30mに切ったと思います」と記憶しており、石岡や弟の栄介と記憶を異にしている。

さらに当時のことを高井にも訊いてみたところ次のように語った。

7 「当時最大の目標は四峰だったと思う。ナイロンザイルがどんなルートで澤田に渡ったか知りませんが、四峰にナイロンザイルを使うことは言われていませんでした。麻のザイルを持参しており、石原国利と澤田の救助には、そのザイルを使ったと記憶しています。松田と私(四峰正面のアタックメンバー)にはナイロンザイルの提案はありませんでした。当初から澤田たちはナイロンザイルを使うつもりで準備しており、石岡は若山に優秀だといわれたナイロザイルを使わせたいという思い入れがあったのではないのでしょうか」

印刷物「ナイロン・ザイル事件」の中の「ザイル購入の事情」¹⁵⁾には次のように記載されている。

「名古屋在住の著名登山家であり、今回初めて登山用ナイロン製品の販売を始められたK氏が昨年11月中頃私の所へ来られ、ナイロン製ザイルの見本数種、同じく布地十数種及びTレーヨンの布地によるオーバー手袋を持参せられ、それに関する豊富な資料を提示された」

この資料から伺えるようにナイロンザイル購入は昭和29年11月中頃以降ということになる。「ナイロンザイル事件報告書」によれば、ナイロンザイル購入は昭和29年12月¹⁴⁾と記載されている。石岡が大枚をはたいてナイロンザイルを購入したのであった³⁸⁾。すなわち昭和29年12月(多分初旬)に石岡が若山五朗をアタックメンバーに決めたことになる。12月20日、若山が名古屋の石岡の仮住居を訪れたとき、³⁹⁾石岡はすでに若山を登攀隊員に決めており、そのとき若

山に東壁登攀隊員に起用することを伝えたのである。

b) 石岡、五朗の墓前で告白—ナイロンザイルは若山のために購入—

石岡は若山の墓前で「赦してくれ。私は本当にね、あのザイルは強いと思って買い与えたんです。それが弱かったでしょう。どうしようもないと思っているんです・・・」と告白し、また「氷壁・ナイロンザイル事件の真実」の中では「長男である私が、実家を継がずに、末っ子の五朗を山に連れ出したあげく、私が買って使わせたナイロンザイルの切断によって山で死なせてしまったんですから・・・」³⁹⁾と記載している。

まず真っ先に「赦してくれ」と石岡は若山を起用したことを詫びた。次いで若山のためにナイロンザイルを買い与えたことを詫びたのであった。しかし若山と同じザイルパートナーだった石原や澤田には何ら詫びていない。やはり石岡は、若山のために買ったという思いが凄く強かったのであろう。それにしても石岡の神経は異常としか言いようがない。

この件に対して高井から一文をもらった。

「石岡はナイロンザイルを買い与えたことを詫びたが、ザイルを会のために買ったものなら、若山以外のパーティーも危険だったのだから、生き残った者にも危険なものを買って与えたことを詫びなければならない。四峰パーティーにも。詫びないのは若山のために買ったからだ。お前たちだけ生き残った、と恨むのは異常だ。生の重さに変わりはない。会のために買わなくとも、同じパーティーには危険だったのだから詫びなければならない」

石岡は、若山の東壁初登攀の成功を祈って、技術未熟な弟のために少しでも良い装備を持たせたいがために、大枚をはたいて優秀だといわれたナイロンザイルを買い与えたのである。石岡は若山の起用を決めてナイロンザイルを購入したのである。

ホ) 「奥又合宿備忘録」から—バッカスの注意とは—

《若山は登攀隊員に起用されることを知っていた》

それまではいつも五朗ちゃんがミッテルだったが、2日朝一寸のところはぜんぜん登れず、国さんに代わって五朗ちゃんがトップになった。岩にかけて吊り上げようとした。(バッカスの注意を忘れてしまっていたものである。バッカスは残念がっていた) 奥又合宿備忘録 室3談より

バッカスの注意が上記文章の直前の「岩にかけて吊り上げようとした」とい

文章を指すのであれば、「岩にかけて吊り上げることはやめておくように」ということだと言えはすむことを、平成 18 年 4 月 13 日、私が「バックスの注意とはどういうことですか」と質問したときに、石岡は「五朗はあまり岩登りはうまいとは思っていなかったが、当時、敏ちゃん(室敏弥)しか御在所のジャンダルムのトラバースが出来なかったところを五朗が出来たんだよ」という理解しがたい返答をしたのであった。このことから判断するとバックスの注意とは、上記の文章全体を指していると考えてよいのではなかろうか。すなわちバックスの注意とは若山に対するものであったが、詳細を語るができなかったのでジャンダルムの話を持ち出したのではなかろうか。これはあくまで推測であるが、「トップで登らないように」と若山に注意したのではなかろうか。石岡が亡くなってしまった今、真実は闇の中である。おそらく昭和 29 年 12 月 20 日若山が石岡宅を訪れたときに、若山を東壁登攀隊員に起用することを伝えた上での注意と考えられる。若山は東壁登攀隊員に起用されることを事前に知っていたのである。だから若山起用を伝えてからは、石岡は不安に襲われ続けたのであった。

へ) 「岩と雪」1 から一若山を起用した石岡の心境一

石原兄は、山へ出発の前日の昭和 29 年 12 月 24 日、石岡宅に泊まり、合宿について語り合った¹⁶⁾。石岡は合宿の縮小を一生懸命薦めたという¹⁶⁾。恐らくこのとき石岡は石原一郎に、若山をアタックメンバーに起用することを了承してもらい、二人で「リーダーの指示」についても検討したと思われる。

石岡は若山の起用を決めてナイロンザイルを購入したのだが、若山は石岡が岩稜会では中の下と評価³⁹⁾した技術未熟な新人であったので、連日連夜、石岡は激しい不安に襲われ続けたのであった。若山が山から帰ってきて彼の無事な顔を見るまでは不安でしかたがなかったのである。それは「岩と雪」¹²⁹⁾に詳しい。

「さて一行 12 名を山へ送り出したが、虫の知らせといおうか今回ほど落ちつかなかったことはない。私の代わりにリーダーとなって山へ行く石原(兄)と出発直前一晩語り合ったが、私は計画の縮小を一生懸命すすめていたし、母の信仰の受け売りをしたりしていた。こういう気持ちは彼らが元気で出発してしまうとうすれゆくものだから、今回はつかみどころのない心配がもやもやと私の頭を占領していて黙っている時間が多くなり、他の人からも『どうかしているのではないか』と再三注意を受けたほどであった。私はしばしば幻影におびやかされていた。腰までもぐる深雪の中をワカンをはいて十貫をこす重荷をもって、雪の中に頭を突っ込むようにして松高ルンゼの急坂を昇ってゆく一行の姿。雪面が破れ、ごうぜんたる新雪雪崩、雪と真っ黒い人間と、もつれ合って落ちてゆく姿が通勤電車の雑踏の中でも私の頭をかすめ

る。又岩壁の手掛りが小さくて手袋をはめておれない。口で手袋をはずす。見る見る感覚が遠のいてゆく。不自然なバランスでアイゼンをつけた足首がガクガクしている。『長びいてはいけない、早く登りきって上のテラスで休憩しなくては』と手掛りをぐいと握って全体重をかける。とたんに墜落、氷片をけとばし、雪煙とともに真逆かさまに落ちる。ザイルが蛇のようにのたうち、次の瞬間恐ろしいほど緊張する。ハーケンがはね飛び、確保者をひきおとす、人間が岩にぶつかる。あの鈍い音、ハーケンが凍った岩にあたるあの澄んだ音、私は汗びっしょりで夢からさめる。という事が続いた」

(「岩と雪」1 1958 所収)

この記事から分かるように、石岡が若山の起用を決めたものの、彼の未熟な技術をあれこれ考えると、石岡は不安で不安でしかたがなかった。その心境が手に取るように分かる。

イ) ロ) ハ)は状況証拠による検証で、これらの事実から石岡が若山を起用したことは分かるが、ニ)は若山の墓前で、石岡の真実の告白であり、ホ)は若山起用を話したときの注意であり、へ)は石岡が若山を起用した石岡の心境である。石岡が若山を起用したことは明白となった。

③ なぜ若山五朗なのか

若山は三重大学山岳部員であって、石岡が決めた便宜上の岩稜会会員である。東壁登攀は岩稜会の目標であって、三重大学の合宿は奥又白までで、それ以上のもではなかった。澤田証言からも分かるように、若山は昭和30年1月3日に用事があったので1月1日に下山予定であった。父若山繁二も昭和30年1月4日の朝日新聞の談話で、五朗は3日か4日に帰ることになっていた、と述べている。

昭和29年12月31日に「五朗も連れて行ってやってくれ」との一言で登攀隊員は石原兄が独断で決めたのではなく、まず石岡が独断で若山起用を決めたのである。「事前協議」や「おはよう日本」の検証から分かるように、石岡と石原兄の事前協議によって実弟である若山が登攀隊員に起用されたのである。

当時登攀隊員の選考は石岡の意向により決まっていた。だから「五朗の挑戦を決めた時に当時絶対安全だといわれたナイロンザイルをもたせた」という「おはよう日本」の発言となったのである。石岡の弟であったから登攀隊員に起用されたのである。

では石岡はなぜそこまで若山にこだわったのであろうか。

石岡は自著「屏風岩登攀記」の中で「私自身の経験からすれば、パーティーを3人にしたことはまったく異例で、これまで困難を予想される仕事に対してはことごとく2名で向かったものである。3名は2名に対して約2倍の時間を

要するというのが常識である」³⁰⁾と述べている。

三人パーティーは二人パーティより 2 倍時間がかかるということを承知の上で、若山を加えたのである。

石岡は計画段階から精力的に冬山合宿について検討を加えており、とくにザイルについては熱心であった¹⁶⁾³⁸⁾。

「この合宿には所用があって参加できない」¹⁶⁾とか「石岡はこの前年現役を引退し、チーフリーダーは石原国利の兄石原一郎であった」⁴⁰⁾と語り、あたかもこの合宿には何ら無関係を装っているにもかかわらず、石岡は自ら合宿計画からナイロンザイル購入に至るまで采配を振るっていたので¹⁶⁾³⁸⁾、石岡は自分自身の姿を若山に投影して、積雪期初登攀を狙っていた石岡の思いをすべて若山に託したのであろう。若山家の栄光のために。

澤田の「前穂高岳東壁遭難報告書」からわかるように、若山が登攀のブレーキとなり、二度のスリップを起こし、二度目にスリップでナイロンザイルが切断して墜死したのである。前穂高岳東壁の積雪期初登攀を狙う登攀隊員に新人で登攀技術未熟な若山五朗を起用したことが、致命的となった。若山五朗を登攀隊員に起用したのは、ほかならぬ若山五朗の兄の石岡であった。

「四峰正面の攻撃に先立つ東壁の冬期初登攀の決行とその日時は、石原一郎君が現地の気象状況、メンバーの登攀技量、体力から決めたんです」との石岡の発言と「遭難した三君は中堅で常に東壁への研究も重ねていた豪のものです…」との談話も、今回の検証結果とは大きく食い違っていた。

④ 石原兄はなぜ若山起用に反対できなかったのか

BC で石原兄は「五朗も連れて行ってやってくれ」と登攀隊員を発表した、と澤田は証言している。「五朗も・・・」ということは、石原と澤田の二人で登攀することになっていたが、「五朗も一緒に連れて行ってやってくれ」と解することができる。

高井の言うように、石原兄の言葉とはとても思えないし、どうみても石原兄が独断で決めたとも考えにくい。やはり昭和 29 年 12 月 24 日、石岡宅に泊まって合宿について語り合ったときに、「五朗も連れて行ってやってくれ」と石岡から頼まれたのであろう。このときなぜ石原兄は若山の起用に反対できなかったのだろうか。

石原兄は平成 6 年に亡くなっており、検証が始まった時点では何も訊くことは出来ず残念でならない。

当時の状況から推察すると、岩稜会の体質が大いに影響していると思われる。というのは会の創立は教師と生徒の関係で始まり、いつまでたってもその関係は払拭されずに続いてきた。そんななかにあって石原兄(山口高商-九大)は旧制

神戸中学の出身ではなく、いわば外様である。だから石岡から依頼を受ければ断ることができない立場であったと考えられる。それほど石岡の力は絶大なものであった。

故井上靖は岩稜会 40 周年記念誌「岩稜」の祝辞の中で、石岡を「岩稜会の会長」と呼ばず、「岩稜会の総帥」と呼んでいる。総帥とは全軍を率いる人である。まことに適切で的を得た表現である。石岡の性格を見抜いていたのであろうか。

当時、石岡の一声で物事すべてが決まっていたのである。「ナイロンザイル事件」然り、また「穂高の岩場」然りである。

石岡は「忌憚のない意見、討論を求める」と言いながら、石岡にとって不都合な意見をまったく聞き入れず、自分の主張を押し通してしまう。だから石岡と反対の意見を言う者は次第に少なくなり、イエスマンばかりになってしまう。そして意見を異にする者は発言せず遠く離れずくっついてきたのである。

そんな総帥石岡を熟知している石原兄はおそらく石岡の意見に反論したくともできなかったのであろう。「五朗を連れて行ってやってくれ」という石岡の依頼を、石原兄はしかたなく受諾したのではあるまいか。岩稜会の体質が悲劇を招いたと言っても過言ではない。

⑤ 石岡が登山技術未熟の新人若山を起用したことが最大のミス

若山の技術が未熟であれ、一旦メンバーが決定されて登攀を開始した以上、リーダー石原兄の指示を無視したことは重大な過失であり、石岡の遭難原因三段階分析法からも明白である。「リーダーの指示を無視して登攀を続けたことが遭難につながった」という石原兄の見解通りであった。

しかし更に詳細に検討を加えてみると、積雪期初登攀を狙う前穂高岳東壁に登山技術未熟の新人若山を起用したことが最大のミスであった。若山を起用したのは他ならぬ石岡自身である。まさか夢が現実になろうとは石岡は思いもしなかったであろう。なぜ若山を起用したか、どういう目的であったか、まったく不明である。生前、石岡に訊いておきたかったが、会談で訊き漏らしたのは残念であった。おそらく石岡は自分自身の姿を若山に重ねて自身の果たせなかった夢—初登攀—（石岡は屏風岩初登攀者ではない）を若山に託したのであろう。石岡のヒロイズムによるのではなからうか。

何も事情も知らずに登攀に加わった若山五朗こそ気の毒であった。そして三人パーティーとなった石原国利も澤田も不本意であったに違いない。

石岡は「トップを五朗に代わらなかつたら五朗は死ななかつたし、リーダーの指示を無視しなければ五朗は助かつた」との思いが強いだけに、「なぜトップをかわつたのだ。なぜリーダーの指示を無視したのだ」と自分の責任を明らかにせず執拗に石原を責めることにより自分の責任を石原に転嫁したのである。

さらに「石原がリーダーの指示を無視したこと」や「石岡が新人で技術未熟な若山を起用したこと」は、とりもなおさず軽率登山である。

石岡—高井会談で認めたように、軽率登山をナイロンザイルに転嫁したのである。

そもそも石岡が実弟若山を冬の穂高の初登攀の登攀隊員に起用したことが遭難に繋がったのである。石岡は功をあせりすぎた。若山五朗は犠牲者である。そして石原も澤田もまた犠牲者といえよう。石岡は悔やんでも悔やみきれない大失敗を犯したのである。

V ナイロンザイル事件の影—「遭難」を「ナイロンザイルの欠陥」に転嫁—

昭和30年1月2日遭難発生。その直後の1月3日午後10時半に石岡は上高地に到着した。⁴¹⁾(「岩と雪1」では3日夜の12時となっている)³⁷⁾以後、石岡は岩稜会会長という立場で精力的に遭難の情報収集に当たり、その情報を冷静に分析し会員に指示を与えていたことは、今回発見された「奥又合宿備忘録」からもよく分かる。

1月4日には遭難の全容を把握し、「ゴロウノミ ゼツボウ サイダイノフコウヲ オワビシマス…」²⁷⁾と実家へ電報を打ったのであった。まだナイロンザイルのことも詳しく分からない段階で、「最大の不幸をお詫びします」と遭難直後すぐ電報を打ったのは、石岡自身に重大な責任があったからである。その責任とは、「石岡が弟若山を山に連れ出したこと」である。「連れ出した」結果、山で五朗を亡くす事態になってしまっただけで誠に申し訳ない、という実家への気遣いであった。さらに若山の不利な情報が公表されることによって若山家(石岡の実家)の名誉に傷がつくことを一番恐れたのである。後日、石岡は実家の父から勘当⁵⁷⁾され社会的制裁を受けたのであった。

1月8日、石岡は上高地で遭難報告書⁴²⁾を作成し、「…今や岳人の間に絶対の信頼をもたれつつあるナイロン・ザイルが切断したということが事件の直接の原因でありますので、ザイル切断に関する資料とそれについての感想を申し述べることは、ザイルの改良、即ち岩登りの発展のための私に課せられた当然の義務ではないかと考え…」と発表した。

1月13日の朝日新聞の「北ア遭難体験記」の談話で石岡は、「遭難した三君は中堅で常に東壁への研究も重ねていた豪の者です。わずか五十センチの転落で新品のナイロンザイルが切れたことは、徹底的に究明が行われることが、今後の遭難を防ぐ唯一の途であると思う」とナイロンザイルの欠陥を強調した。

この遭難情報を公表するに当たって、石岡は岩稜会会長という立場を忘れ、遺族という立場—事故原因を不可抗力の中に押し込んで犠牲者のそしりから免れたいという意識—で情報分析したものを公表したのである。

さらに遭難を一層総括しにくくしたことは、遭難当事者間の兄弟関係—石岡と若山(石岡の実弟)、石原一郎と石原国利は兄弟—であった。

石岡は、若山の登攀技術の未熟さと石岡が新人の若山を冬期初登攀の東壁のアタックメンバーに起用したことを指摘されることは、弟の若山、ひいては石岡自身が軽率登山と非難されることであるから耐えがたいことであった。

一方、石原兄は「国利が勝手なことをした。リーダーである私の指示を無視して登攀を続けたことが遭難につながった」と遭難原因を分析していたが(高井談)、やはり弟を責めることになるのでなかなか言い出しにくかったのであろう。もし石岡と若山、石原一郎と石原国利が兄弟関係でなければ、遭難原因について徹底的な追及がなされ、責任も明確にされて、まったく違った展開をしたに違いない。

「当時、石岡は遭難の全容をすべて掌握し詳細に分析していたので、自分にとって不利になる情報を封じて、登攀について自由に発言できる雰囲気ではなかったのですよ」と高井は当時を振り返って語った。

鈴鹿の反省会でも石岡はもっぱら搜索の議論に徹し、登攀を総括しようとする石原一郎と高井の口を封じたのであった。このときすでに石岡は、「遭難をナイロンザイルの欠陥に転嫁する」というドラマのシナリオを作り上げていたのであった。

今回の遭難では登攀者がスリップしてナイロンザイルが切断し墜死したので、ナイロンザイルの切断に焦点が絞られた。その結果、石岡は岩稜会会長としての立場—登山の規範倫理に照らして登山が妥当であったか否かの意識—で登攀の詳細(トップの交代、リーダーの指示、初心者の起用等)について検討していたが、それを封印してしまった。換言すれば石岡は遺族という意識が強く働いて、総括したくとも総括することができなかった。

このことにより、蒲郡事件で篠田軍治の学者としてのモラルを追及した石岡が、東壁事件では登山家としてのモラルを問われるとは皮肉である。

東壁遭難事件はナイロンザイルの切断により起り、一見不可抗力とみられているが、総てが不可抗力と言えるだろうか。否、初心者若山にトップを交代したこと、「昼までに第二テラスに着かない時は引き返す」というリーダーの指示を無視して登攀を継続したことが遭難につながったのであり、さらに初心者若山を起用したことが最大のミスであった。

それ故、岩稜会会長として石岡は、率直に登攀記録の真実を白日のもとに曝して批判を受けるべきであった。しかし石岡は軽率登山の誹りを受けたくないがために、遺族という意識が大きく作用して、焦点をナイロンザイルの切断に絞った。そして間違ったシナリオに従って見事にナイロンザイル事件に転嫁し

たのである。

前穂高岳東壁遭難から50年経った現在、石岡はナイロンザイルの欠陥を究明することに成功し世の喝采を浴びた。そして「おはよう日本」(平成18年7月2日NHKテレビ)で、石岡は「赦してくれ。私は本当にね、あのザイルが強いと思って買い与えたんです。それが弱かったでしょう。どうしようともないと思っているんです。…」と弱いザイルを持たせたことを謝った。だが最後の最後まで若山の起用については口を閉ざしたままだった。だが石岡は「岩と雪」1に若山起用の心境を吐露しており、石岡が若山をアタックメンバーに起用したことが明らかとなった。

しかしナイロンザイルの欠陥の究明—登山道具の究明—に成功したことにより、遭難に至った登攀—登山行為—について総括することを免責されることにはならないのである。

だから石岡は「遭難をナイロンザイル事件に転嫁した」と明言した高井書簡に怯え続けてきたのである。さらに石岡は死ぬまで決して自ら語ろうとはなかったが、「リーダーの指示を守っていたら、五朗がトップに交代しなかったら、そして私が五朗をアタックメンバーに起用しなかったなら、五朗は死ぬことはなかった」と、50年もの間、胸に秘めて苦悶してきたにちがいない。

石岡が遭難当時の父の心境として語った言葉、すなわち「長男である私が、実家を継がずに、末っ子の五朗を山に連れ出したあげく、私が買って使わせたナイロンザイルの切断によって山で死なせてしまったんですから。悲しみのどん底に突き落とされたんです。そのうえ、死んだ原因を私がナイロンザイルのせいにした」³⁹⁾という言葉が50年経った石岡の心境として、私はそっくりそのまま石岡に返したい。

まとめ

- 1 石岡が新人で実弟の若山五朗を前穂高岳東壁の登攀隊員に起用したことが遭難の最大の原因であった。
- 2 リーダー石原一郎の「昼までに第二テラスに着かないときは引き返すこと」という指示を無視して石原国利が登攀を継続したことが遭難につながった。
- 3 力のない新人・若山五朗にトップを交代したことが遭難につながった。
- 4 石岡は前穂高岳東壁遭難の原因をナイロンザイルに転嫁したことを認めた。

文献

- 1) 岩稜会 ナイロンザイル事件 関係資料 20-21 1956
- 2) 石岡繁雄 ナイロンザイル切断事件の真相 岩と雪 1 94-95 1958
- 3) 澤田栄介 前穂高岳東壁遭難報告書 三重大学山岳部会報 1956
- 4) 澤田栄介 前穂高岳東壁遭難報告書 岩稜 334-341 1987
- 5) 今井喜久郎 春季搜索行 三重大学山岳部会報 1956
- 6) 今井喜久郎 春季搜索行 岩稜 384-387 1987
- 7) 今井喜久郎 春季搜索行 三重大学山岳部会報 1956
- 8) 今井喜久郎 夏季搜索行 岩稜 388-393 1987
- 9) 岩稜会 奥又合宿備忘録 12 1955
- 10) 岩稜会 ナイロンザイル事件 4 1956
- 11) 石岡繁雄 ナイロンザイル切断事件の真相 岩と雪 1 94 1958
- 12) 岩稜会 岩稜 172-177 1987
- 13) 岩稜会 ナイロンザイル事件 関係資料 18 1956
- 14) 岩稜会 ナイロンザイル事件報告書 49 1977
- 15) 岩稜会 奥又合宿備忘録 1 1955
- 16) 石岡繁雄 ナイロンザイル切断事件の真相 岩と雪 1 95 1958
- 17) 岩稜会 岩稜会員に告ぐ 259-264 1978
- 18) 石岡繁雄 氷壁・ナイロンザイル事件の真実 177 2007
相田武雄
- 19) 岩稜会 ナイロンザイル事件報告書 53 1977
- 20) 岩稜会 ナイロンザイル事件 31-41 1956
- 21) 岩稜会 ナイロンザイル事件 関係資料 192-202 1956
- 22) 岩稜会 ナイロンザイル事件報告書 14 1977
- 23) 石岡繁雄 氷壁・ナイロンザイル事件の真実 141-142 2007
相田武雄
- 24) 岩稜会 ナイロンザイル事件報告書 16 1977
- 25) 日本山岳会 東海支部報 No110 3-4 2007
東海支部
- 26) 岩稜会 岩稜 100-101 1987
- 27) 岩稜会 穂高の岩場 114-153
- 28) 岩稜会 岩稜 105、359-361 1987

- 29) 全日本山岳 東海支部報 No110 3-4 2007
連盟東海地
区山岳連盟
ヒマラヤ委
員会
- 30) 石岡繁雄 氷壁・ナイロンザイル事件の真実 139 2007
相田武雄
- 31) 石岡繁雄 ナイロンザイル切断事件の真相 岩と雪 1 102 1958
- 32) 文部省 高みへのステップ 32 1985
- 33) 石岡繁雄 氷壁・ナイロンザイル事件の真実 20 2007
相田武雄
- 34) 石岡繁雄 氷壁・ナイロンザイル事件の真実 10 2007
相田武雄
- 35) 岩稜会 奥又合宿備忘録 4 1955
- 36) 石岡繁雄 ナイロンザイル切断事件の真相 岩と雪 1 96 1958
- 37) 岩稜会 奥又合宿備忘録 6 1955
- 38) 石岡繁雄 氷壁・ナイロンザイル事件の真実 12 2007
- 39) 石岡繁雄 氷壁・ナイロンザイル事件の真実 125 2007
- 40) 岩稜会 ナイロンザイル事件報告書 2 1977
- 41) 岩稜会 奥又合宿備忘録 5 1955
- 42) 岩稜会 ナイロンザイル事件 関係資料 17 1956